

## 『わかりあえないことから — コミュニケーション能力とは何か』

著者：平田 オリザ

出版：講談社現代新書

発行：2012年10月18日



大学等新卒者の採用において企業が重視することを尋ねたアンケート（日本経済団体連合会「新卒採用（2012年4月入社対象）に関するアンケート」）調査結果で、最も多かった回答は「コミュニケーション能力」（82.6%）。このほか「主体性」（60.3%）、「チャレンジ精神」（54.5%）、「協調性」（49.8%）などが上位にあがっている。このように企業が新卒採用にあたって最も重視している能力は、9年連続で「コミュニケーション能力」がトップである。しかし中高年の多くの管理職は、「近頃の若者はコミュニケーション能力がない」と嘆いている。近頃の若者に「コミュニケーション能力がない」というのは、本当なのだろうか。本書はこの問いかけから始まっている。

そもそもコミュニケーション能力とは何なのか。他者とうまくやっていくことのできる能力なのか。それとも話し上手、聞き上手。人前でうまく話すことができる能力なのか。まったく漠然としていて、コミュニケーション能力とはこのことだと、果たして説明できるのだろうか。

しかし企業が要求するコミュニケーション能力とは、「グローバル・コミュニケーション・スキル」＝「異文化理解能力」なのである。異なる文化、異なる価値観を持った人に対しても、自分の主張を伝えたり、説得・納得して、妥協点を見いだしたりすることができる能力である。しかし一方で、日本企業の中で求められているもう一つの能力は「上司の意図を察して機敏に行動する」「会議の空気を読んで反対意見はいわない」「輪を乱さない」といった従来型のコミュニケーション能力である。このように2つの矛盾した能力を同時に要求されている、まさにダブルバインド（二重拘束）の状態である。

日本のコミュニケーション教育が「わかりあう」ことに重点が置かれているが、「わかりあえない」中で、共有できる部分を見つけたときの喜びもある。

そこで筆者は「わかりあえない」ところから出発するコミュニケーションについて注目している。わかりあえないことを前提に、わかりあえる部分を探っていく営み。互いにすりあわせ歩み寄る事が、コミュニケーション能力であるという。従来のコミュニケーションに対する価値観を、一旦クリアさせられるような感覚を覚えた。

大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授である著者は、もともと劇作家であり、劇団「青年団」を主宰する生粋の演劇人。近代演劇では「対話」が最重要視される。「対話」とは、あまり親しくない人同士のあいだ、または、親しい人同士のあいだでも、異なる価値観や情報について交換し合ったり、すりあわせをしたりすることなのであるが、日本社会にはこの「対話」という考えがほとんど存在していない。このことに対し著者は、「会話」と「対話」を区別し、「対話」を重視している。演劇人ならではの演劇を用いたコミュニケーション教育のありかたに焦点を絞って述べられているところが興味深い。ビジネス教育では重要なポイントであるコミュニケーション能力、コミュニケーション教育というものを、もう一度見つめてみるきっかけとなる一冊である。

起業教育研究会 企画委員  
伊丹市立伊丹高等学校 教頭 井上仁志